



2004.12
No.4

特定非営利活動法人C.P.I.教育文化交流推進委員会
発行所 : C.P.I.スリランカ事務所
c/o : Sri Lanka-Nippon Educational and Cultural Centre
Mahindarama, Road, Etul-Kotte, Kotte, Sri Lanka
本部 : 東京都三鷹市中原2-16-9 Tel:0422-49-3808
E-mail: CPI_mate@muh.biglobe.ne.jp
URL: http://www.cpi-mate.gr.jp

日本の会員の皆さん お元気ですか

この活動をなぜ始めたのか、お話しします

SNECC理事長 U.スマンガラ博士 思い出を語る

多くの方々との出会いがあって、そして、多くの方々の力が今の支援活動の基礎となっております。スリランカの子どもたちを支援してくださる会員さんに感謝します。C.P.I.の活動こそ、私たちの自慢できる誇りです。

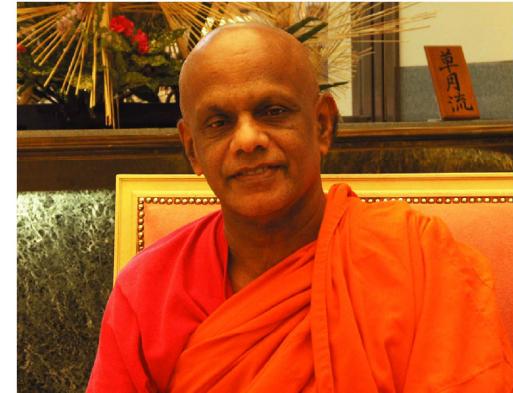
継続こそ偉大な“ちから”

今年で61歳になる私の人生で一番嬉しいことは、スリランカ日本教育文化センターをつくるてスリランカの子どもたちのために役に立つことができたことです。私たちの活動が19年間続けてきたことは、素晴らしいことだと思っています。C.P.I.の教育里親としてスリランカの子どもたちへの協力活動を始めてくださった皆様も、ひとりが卒業したらまた次の子どもを守ってくださいり、長い交流を続けていただきたいのです。

多くの出会い、そして励まされて

私がどうしてそのような活動をすることができたのかをお話したいです。私は子どものころカバンがなくて、本を拾った新聞紙に包んで学校に行っていました。OL試験のときも、会場に履いていく靴がなくて、友だちから借りました。その試験に合格した後は、近くに高等課程の学校がなくて、若いお坊さんが勉強するピリワナ学校で勉強を続けなければなりませんでした。でも、そこに尊敬できるお師匠さまがおられて、僧侶となり、大学まで出していただいたのです。1978年、34歳の時に、日本政府留学生として日本にも来ることができました。

ところで、私自身、日本に来たときは右も左も判りませんでした。そのとき大阪商工会議所のお世話を日下さんご夫婦(現C.P.I.顧問)が里親となってくれたり、大いに力づけられた。そして日本での生活に自信が出来て、励まされて、今日があると思っております。ですから私は、私と同じように苦労しても勉強を続いているスリランカの子どもたちは、貧しさを悲



しむ代わりに、努力するなら、きっと大きな可能性があると信じていますし、里親の皆さんのお励ましがどれほど大きなものかを、よくわかつております。

多くの方々の力が 今の支援活動の基礎を作りました

1986年、スリランカでの私のお師匠さまのおかげでチャンダシリさんと一緒にコッテにスリランカ日本教育文化センターという小さな交流の場をつくり、日本人たちにスリランカを紹介したり訪問のお手伝いをしているうちに、日本の皆さんと一緒に奨学金のことを始めたいと考えました。そのとき私は、まだ日本で勉強を続けていましたが、ちょうどそのころ、C.P.I.の小西さんと出会いました。そのご縁で、<日本での教育里親運動>という新しい活動を起こすことになったのです。私は小西さんと一緒にあちこちに行き、日本でもスリランカでも、会う人はみんな、教育里親一里子の活動のことを話しました。お昼のレストランで食事を待っている間も、立ち寄ったお寺の住職さんにも、電車の中で話しかけてくる人にも、誰にでも話したことを思い出します。たくさんの方々にお会いして、その中には私たちの活動を自分のことのように考えてくださる方ができました。その皆さんのおかげで本部センターの土地を買うことができ、まだまだ小さかった活動を日経新聞や朝日新聞のみなさんがニュースにして下さいました。小西さんのお願いを聞き届けてくださいり、スリランカセンターの本部建物と敷地整備に支援してくださった日本政府には、厚く感謝を申し上げます。

この活動の輪を広げてください

呼びかけに応じてくださった里親の皆さんのおかげで、たくさんの貧しい子どもたちが勉強をできています。スリランカの中で立派な活動をしている寺院のお坊さんたちが、地域のセンター長になってくださり、全国100以上の活動の場所ができました。これらは、ほかにはない素晴らしいことです。どうか、この素晴らしい活動のことを、他の人々に話してください。

そのとき活動の輪は広がり、新しい人が続いてくれるでしょう。よろしくお願ひ致します。

《スマンガラ師の略歴》

スマンガラ師は12年間(1978--1990)大谷大学で特別研究をされていました(カンボジアの仏教經典のわが国唯一の研究者)。1986年にS N E C Cを設立され、総裁に就任されました。1995年に故郷のミーガハテンナに実務学校を開設。1999年にアメリカに渡り、ヒューストンで上座仏教の布教責任者として活躍されています。

.....エピソード.....

「私は無から生まれ、無に還るだけ。私へのお金は全て人々から与えられたものだから、人々のために役立ちたい」スマンガラさんの今も変わらない信念です。スマンガラさんのエピソードは、『光り輝く島のこどもたちから(C.P.I.発行)』のP27~P33に詳しく載っています。

小西さん(現・C.P.I.会長)との奇跡的な出会い、小西さんのその後の人生を一変させたスマンガラさんの言葉、小西さんが教育里親運動を一生の仕事とするに至った劇的な事件…など、この小さな囲みでは語りきれません。会員の皆様は、お手元の本を読みかえしてみてください。



1993年に竣工した現在のSNECC本部センターとC.P.I.スリランカ事務所
(最初は、現建物の二階レベルの土地に小さな小屋があつただけでした)



日曜日には日本語教室が開かれている



センターの玄関で談笑する里子たち

※この記事は、平成16年9月にスマンガラさんが来日された折に書いていただきました。

——こんにちは新聞編集委員会(山川)

ミシン一台から始めた縫製業

高等課程のあと職業訓練校、就職を経て現在に

コロンボ郊外にある彼女の工場を訪問し、彼女にインタビューをしました。

(C.P.I.スリランカ事務所 中濱)



コロンボ郊外マハラガマの自宅兼仕事場にて

奨学金が一番の助けになりました！

農業をやっていた父が13年前、ギーターニさんが14歳の時事故で死んで、母と弟、妹の4人になった。成績が良かったので、校長先生が推薦してくれて、C.P.I.の奨学金をもらうことが出来た。親戚の人も勿論助けてくれたけれど、奨学金が一番助けになった。「OL／AL／職業訓練コースの間、援助をして戴いた。いま自分たちの生活があるのはC.P.I.の奨学金のお陰です」と彼女は明るい笑顔で感謝してくれた。

お父さんが亡くなつてからのこと、学校生活のこと、ビジネスを始めたきっかけは？

母は一人では農業を続けられずお菓子作りを始めた。家族全員、お菓子作りや家事を手伝いながら生活した。

学校の科目では数学や英語が得意で、大学へ行って学校の先生になりたかった。スポーツも得意でバレーボールなどで賞状をいっぱいもらった。高等課程では、生徒会長にも選ばれた。

AL試験は1回目で合格したが、大学へ行くのに成績が少し足りなかった。もう一度ALを受けていれば大学にも行けたと思うが、その頃付き合い始めた幼なじみ(現在の夫)と相談し、大学へ行くのは止めて、ビジネスを始めることにした。まずは職業訓練校で美容師の資格を取りその仕事を始めた。またほとんど同時に自分で縫製の勉強も始めた。最初は家で母が使っていた家庭用のミシンで練習した。縫製を始めた頃は美容師と両方の仕事をした。

いまどのような仕事をしていますか？

女性の下着を作つて、コロンボの近くのマハラガマのお店に卸している。最北部のジャフナや東海岸のバティカロワからも注文をもらっている。お正月(4月)の時は、生地を仕入れて他の業者に製造を依託したりもする。最初は夫と二人だけで縫製の仕事をしていたが、一人、二人と人を増やし今では5人の人を雇つて縫製をやつている。今はもう自分で縫つていらない。朝は4時頃一緒に起き、夫は5時半頃外回りの仕事に出かける。以前はバイクだったが、いまはワゴン車で外回りをしている。3時頃帰つてくるが、そ

のとき生地も仕入れてくる。工場は8時から始まり、従業員は出来高払いなので仕事のはかどりかたに応じて5時から7時頃帰る。私たち二人はそれから出来たものの箱詰めや、次の日の作業の準備などをしていると、寝るのは12時半くらいになつてしまう。

仕事をしている時以外は何をしていますか？

食事をするときはテレビをつけているが、ニュースを耳で聞いているくらいでドラマなんか見たことはない。夫とはビジネスの話ばかりになつてしまう。休暇は、正月、近くの所へ旅行するとき。正月(4月13日)の前日から1週間位は仕事を休みにしている。

夫とは2年前に結婚し、実家の畠だった所に家を建て、夫と赤ちゃん(6ヶ月)の3人で暮らしている。同じ敷地内の以前から住んでいる家に、母親が弟と妹と暮らしている。私は、小さい子がいるので最近は主婦業が多いけれども、夫がセールスなどに出かけている間は工場をみていて。身体を動かしているのが好きなので、暇があると自分で庭の手入れもする。だからお手伝いさんは雇っていない。

里親さんについてどう思っていますか？

一番苦しいときに助けてもらった里親さんには本当に感謝している。千葉の方で名前はいまでも勿論覚えている。手紙ももらったが、一度その方が、仕事か何かで旅行中、飛行機の出発が遅れたとかで時間が出来、急に会いに来てくれたことがある。たまたまそのとき家にいたので会うことが出来、とっても嬉しかった。

インタビューアの感想

忙しい中、時間をとつてくれて、お母さんに赤ちゃんを見てもらいながらインタビューに応じてくれました。

彼女の前向きな態度、行動力はとてもビジネスに向いている人だと感じました。また、毎日忙しい中でも「ビジネスの状況は常に変化するので、夫と次の新しいビジネスを考えているところ」と、抱負も語ってくれました。本当にインタビューしたこちらも元気が出るような、活き活きしたギーターニさん！

これからも心から応援したい気持ちになりました。

家庭独特の味付けがカレーの美味しさ

私は今年AL試験に合格しましたが、大学に入る資格は取れませんでした。今、来年もう一度受けるために勉強しています。

日本語はハルシャ先生の教室で2級を目指して頑張っています。日本語も好きですが、英文学も続けたいと思っています。

大学がだめならケラニヤ大学の聴講生を申し込むつもりです。今日は私たちの食事のことを書きます。

ドゥリーカ・サウミヤ（コックス・センター、里子番号3624）



パン食がふえてきました

スリランカの主食は米です。ご飯と一緒にいろいろなカレーを混ぜて手で食べます。でもパンを食べることが多くなってきています。一日の食事は普通、朝はパンにカレー(豆のカレーやサンボーラという椰子の実から取ったもの)、昼はご飯とカレー(魚か鶏肉のカレー、野菜のカレーを2種類くらい)、夕飯はご飯(パンの時もある)とカレー2、3種類が普通の食事です。食事中は水を飲みます。紅茶は10時と3時のお茶の時間に、おやつと一緒に飲みます。

スリランカではいろいろな野菜や食用の木の葉を栽培しています。またスリランカは周りが海ですので魚もたくさん食べます。

お坊さんやお客さんに先に食べてもらいます

私の家族は父と母そして同居のいとこです。いつもみんなで一緒におしゃべりをしながら食べます。親戚の人たちや、親しい友人と一緒に食べるときもあります。初めてのお客さんの時は、お客さんが先に食べます。お坊さんがもしいると、お坊さんが済んでから他の人が食べます。



市場には沢山の野菜が売られている

スーパー・マーケットは少し高い

食料は近くの店で買います。魚屋が売りに来たり、パンも朝早く売りに来ることもあります。スパイスの調合はその家の味ですから、主婦は材料を買って、自分で調合しながら粉にします。

最近スーパーが増えていますが、石鹼などの日用品を買いに行くとき、一緒に食材を買うこともあるけど、やはりスーパーの方が少し高いように思います。マクドナルドやケンタッキーの店が増えてきていますが、まだいったことはありません。ハンバーガーがひとつ150ルピーもするので、とても高くて買えません。(お米が1kg 35ルピーです)

スパイスは健康の素

スリランカでは普通伝統的な料理にはケチャップなどは使いません。木の葉や木の実を粉にしてスパイスとして使います。にんにくも色んな料理に使います。これらのスパイスのおかげでおなかの調子が悪くなることはないといわれています。

椰子とスパイスがカレーの決め手

カレーを作ると、椰子の実を割って、内側にている白い部分を削り取って、絞ってその汁をカレーに入れます。調味料としていろんなスパイスを使います。普通これらのスパイスは店で買ってきてものをすりつぶして粉にしてとっておきます。何種類かのスパイスを混ぜて使います。お店でも粉にしたものを持っていますが忙しい家ではこういうのを使っています。

豊富な野菜とカレー

野菜の種類は多く、色んな調理の仕方をします。生で食べたり、ゆでたり、煮たり、油で揚げたり、カレーにしたりします。にんじん、きゅうりなどは細く切って、塩とトマトを入れて、胡椒を混ぜてサラダを作ります。普通スリランカ人は料理は辛くして食べますので野菜も辛い味にして食べます。なすびは色んな調理の仕方があります。切って油でいためておき、にんにく、カラピンチャという葉、青唐辛子、たまねぎ、トウナパハという色んなスパイスを混ぜたもの、塩、トマト、ポルキリという椰子の実の内側の白い部分を絞った汁も混ぜてまた油でいためます。

魚もよく食べます

魚も色々な料理法があります。ゴラカ(酸味がある)、胡椒をすりつぶし、塩を加えてタレを作ります。魚を切って、そのタレをいれ、水を少し加えてよく混ぜます。そしてよくいためます。土鍋で作ると冷蔵庫に入れなくても長く持たせることができます。魚や肉は特に辛くして食べます。

普通の家庭では野菜料理が二種類と、魚の干物か肉などの取り合わせで食べます。

肉はもっぱら鶏肉

スリランカでは肉も食べますが、牛肉や豚肉はあまり食べず、鶏肉がよく食べられます。肉も色々な調理法をします。揚げたり、いためたり、カレーにしたり、たまねぎ、にんにく、唐辛子、カラピンチャ、しょうがを油でいためて、肉用のスパイス、胡椒、唐辛子を加えて少しいため、それに肉、塩、シアンバラーやゴラカという木の実を入れて水を少し入れて弱火で長くゆでます。

ヤシとスパイスが調理のカナメ

田舎の人は普通朝昼晩三食米を食べます。あるいは朝は芋や豆をゆでて食べます。昼は普通カレーライス、夜はご飯か小麦粉で作ったストリング・ホッパーという麺状の食べ物や、ホッパーという丸く薄い形の食べ物を食べます。

都会の人は、朝はパン、昼はカレーライス、夜は何か店から買ってきていたものを食べて済ませます。このようにスリランカでは食べ物のほとんどに椰子とスパイスを使います。



ストリング・ホッパー(左2種類)と楕円のホッパー



いとこを交えて楽しい夕食の団欒

ドゥリーカさんの家の夕食

左から「パパダン」

米の粉をあげたもの。振り掛けみたいにしてご飯にかける。

「魚のカレー」

「ジャガイモのカレー」

「ダール豆のカレー」

「インゲン豆のカレー」

中央「赤米のご飯」

白いお米と赤いお米があるが、赤米の方が栄養があるとされておりドゥリーカの家では赤米が多い。





日本語が大好き、日本大好き！ 大学にいって日本語を勉強したい、 いつか日本に行きたい！

私はコロンボの近くのパンニピティヤという町に住んでいます。ヌガゴダという町のシャーンタ・ジョセフ・ウイディヤーラヤ校の十三年生です。私の家族は五人で祖母の家に住んでいます。

姉は私立病院の看護婦をしています。

父は民間企業の警備員です。

私の妹は少し障害があるので障害児学校に通っています。そのため母はいつも妹を学校に連れて行くなど、色々と世話をしなければなりませんので、外で仕事が出来ません。私も時々母の家事の手伝いをします。

CPIの奨学金を初めてもらったのは二〇〇〇年です。その時私はアーナンダ・バーリカ校の九年生でした。学校の先生が私の為に奨学金の申し込みをしてくれました。私はSNECCのことによく知りませんでした。私は自分に奨学金が与えられたのは本当に幸運だったと思います。私が将来の計画を立てることができるのは、CPIの奨学金のおかげだといつてよいからです。

SNECCはスリランカ全土の多くの学生たちに教育里親—里子制度を通して奨学金をあげています。私もやはりそのように日本の教育里親さんがおられます。毎年、学年のはじめに、学校の制服のための布や学用品を戴くセレモニーがあります。靴を買うお金も貰います。私たちは、教育里子として選ばれたのですから、学業を頑張るほかに義務が

あります。ひとつは年三回日本の里親さんに手紙を書くこと。もうひとつは学生報告書にある項目に記入して、決められた期日にセンターに提出することです。土曜日の補習クラス、日曜学校、日曜日の日本語クラスでも勉強することができます。

これらのこと、OL試験まで私は自ら進

んできちんとやりました。私はこのセンターで行われている補習クラスのほかに塾に行つたことはありませんが、OL試験には良い成績で合格できました。ですからそれには満足しています。私は、AL試験には文系で受験しますので、日本語、シンハラ語、地理を科目として選択しています。私がAL試験で日本語を選択できたのは、ずっと日本語クラスに通い続けたおかげです。私は日本語が好きです。日本のこと好きです。ですから私はもつと日本語を勉強して、日本へ行つてみたいという希望をもつていています。

私たちの学校にも日本語のクラスがあります。先生は私たちを日本料理店に連れて行ってくれました。私のただひとつ希望は日本語を徹底的に勉強することです。AL試験を良い成績で合格して、大学で日本語を専門に勉強したいです。

私の勉強を応援してくれる日本の里親さんと、私の家族と、SNECCの職員の皆さん、CPIの皆さん、先生、皆様に感謝いたします。

マヘーシカ・プラバーシニ(コーチテ・センター)

ンカに来ています。私の里親さんもいつか来て戴きたいと思います。私は、私の為にこんなに援助してくださいます。手紙は頂きましたが写真はまだ戴いていませんでした。どんな方だろうといつも考えています。

大学に行つて日本語を勉強したい



私の学校は生徒数2000人の、大きな女子学校です

生徒会でも活躍するリランティさんの夢

私たちの学校は、コッテのほぼ中央部にある女学校です。1学年から13学年まであって、1学年4学級で1クラス約40人、全校生徒数約2,000人の大きな学校です。先生は約90人いますが、ほとんど女の先生です。ニール先生は、私たちC. P. I. 奨学生の先輩で、数少ない男の先生の一人です。ニール先生は小学校部の先生をしています。

この学校の特徴はバレー、空手など運動のクラブが盛んです。絵やダンスのクラブも盛んです。学校はコッテの中では優秀な方で、特に商業(ALのコマース)のコンテストで地区ではいつも成績がいいので有名です。女子校なので生活科学(家庭科)があり、今も裁縫、料理等を習っています。(日本では保健教育として、妊娠、出産、育児などに重点が移っていると聞きましたが、スリランカの学校では、まだそこまで行われていません)

クラスを代表して生徒会で活動しています

私はクラスを代表して、全校で40名ほどの生徒会委員の一人です。生徒会委員は学校行事などの計画を作ったり、受付や進行係、案内役をしたりします。

学生たちと、仲良く協力して仕事すること、他人の意見を尊重すること、大人のいうことをよく聞くことなどを学びました。生徒委員たちが協力して学校で行う行事をよく組織し、きちんと催すことができるようになりました。とても忙しいのですが、上級生の意見や先生の考えも聞くことが出来て役に立ちます。これらの経験は楽しいし、将来きっと役に立つと思うので一生懸命やっています。

将来医者になって



クラスのミーティングで議長をするリランティさん

恩返しをしたい

もちろん、学校の勉強もちろんとやっています。定期試験ではクラスで一番の成績でした。音楽も大好きで学校主催のコンテストにも出ています。



私は将来、医者になりたいと思っています。教科としては数学、理科が得意で大好きです。大学の医学部では英語の授業となるので、今から英語は意識して勉強しています。ところで、私はいま11年生ですので、今年12月にOL試験を受けます。私は今そのために一生懸命勉強しています。そして、OL試験をよい成績で合格して、13年生の終わりにあるAレベル試験では生物選考クラスを受けたいと思っています。

毎週土曜日のセンターでの補修クラスも私の勉強を助けてくれます。SNECCの図書室も私の知識を広げるために大変役立っています。SNECCの日曜学校にゆくことは、人生に役立つ経験を色々与えてくれます。家庭は裕福ではありませんが、私はC.P.I.の奨学金で勉強できることを嬉しく思っています。たくさんの皆さんに応援して戴いたのですから、これから先どんな困難があっても子供のころからの夢を実現させるために努力します。

私の人生を成功に導くために援助してくれる両親と日本の里親さんとC.P.I.の皆様に感謝いたします。

リランティ・ラシカ (No. 4916)

ANANDA BALIKA SCHOOL 11年生



生徒会長や副会長と話すリランティさん

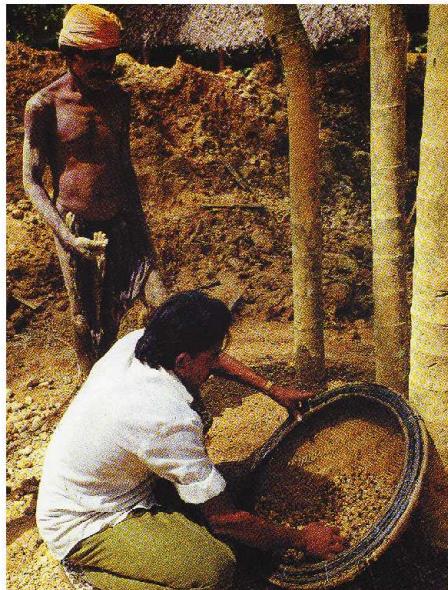
宝石の島・スリランカ エリア紹介

ラトナプラには宝石がいっぱい

J·M·セーパーリ・チャトゥリカ (No. 3725、ラトナプラ・センター)

古くからスリランカは宝石の産地として世界的に有名です。宝石は自然がわが国に与えてくれた貴重な贈り物だと私たちは考えています。私たちが住むラトナプラ県は、昔からよい宝石を多く産出することで知られています。

ラトナプラとは宝石、プラは都の意味です。コロンボからバスで南東に3時間ほど行った所です。ラトナプラの市街地を少しそれぞれたところには、いたるところに宝石の採掘現場を見ることが出来ます。特に川沿いには簡単な採掘小屋が沢山あります。ここでは川や山の地下だけでなく、水田や空き地、ゴム林にも宝石の原石が眠っているかも知れません。地下深くにある宝石を掘り出したり、または川の中の砂をさらってふるいにかけ、宝石を採ります。多くの人たちが一攫千金の夢を追って、生活をしています。



スリランカでとれる宝石にはサファイア、ルビー、ガーネット、アクアマリン、アレキサンドライト、エメラルド、トパーズ、トルマリンなどがあります。1907年には、世界一大きなブルーサファイアが、ここで見つかりました。

宝石の原石は、掘り出した石や土の中からを見つけ、磨かれ、色々な形にカットされます。

そして初めて美しい輝きが得られるのです。

宝石が産出するためにスリランカには、宝石加工の工場がたくさんあります。そのおかげで人々は、様々な職業が得られます。宝石を掘る人、仲買人、鑑定人、宝石研磨職人、アクセサリーを作る人、国内の店で売る人、外国に輸出する人などいろんな職業の人方がいます。たくさんの宝石が採れますので、スリランカはラトナディーパ(宝石の島)とも言われています。

大洪水でC.P.I.の皆さんから大きな支援をいただきました

2003年5月にスリランカ南西部、特にラトナプラからマータラにかけて大雨が降りました。全体で265人の人が亡くなりましたが、幸い、里子やその家族で無くなつた方はいませんでした。でも地面から十メートルほどの高さまで水が来ましたので、いろんなものが流れてしましました。家を流された里子もいました。C.P.I.からSNECCを通じて救援物資が届けられました。それは学校の教材や衣類でした。家を無くした家族のために、家を造ってもらった人もいます。私たちはとても嬉しく思いました。いつも私たちの教育の支援をしていただいていることに感謝していましたが、このような緊急の支援もして戴き、ほんとうに有難く思っています。



学用品など支援物資を受け取る里子たち



洪水で家が壊滅してしまったが、幸い家族は全員助かりました

教育里親と里子の間で文通を始めたきっかけ

スリランカ日本教育文化センターは、日本の教育里親さんの協力で教育里子制度を実施し18年になります。C.P.I.の小西会長は、“ひとりの教育里子”と“ひとりの教育里親さん”を結んだ援助のやり方を、日本に広めるために頑張ってこられました。私たちがともに取り組んできた活動はいろいろあります。スリランカのセンター本部の建物をつくり、子どもたちの学習活動をひろげました。両国で、互いの生活を研修するプログラムを行ってきました。

学校を卒業することと、手紙は、里親さんへの贈り物

里子に教育の支援をしてくださっている里親さんにとって、里子からの手紙は大変うれしいものでしょう。ですから、里親さんからの奨学金の援助に感謝の意を述べ、少しでも恩返しできることは、手紙を書くことだと言い聞かせています。

里親さんにお金や物をお願いしないように言ってあります。毎日の生活で何か新しいことがあれば書くように、また学校生活で特別なことがあれば書くように、自分のことをよく知って戴けるように書くように、と言っています。

手紙を書くことが苦手な子どももいますが、里子には年3回手紙を書くように指導しています。「年間行事表」で決めた日までに、所属する地域センター長に手紙を渡して、その後手紙のやり取りは右の図のような流れで行うようにしています。

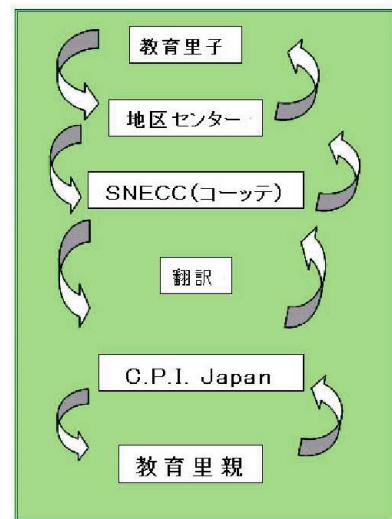
まだまだ上手くいかないこと、課題がたくさんあります。

以前はすべて英文で書くように指導していました。英語の勉強にもなるからです。しかし、思ったことを自由に英語で書ける子どもは少なかったので、自分の書きやすい言葉で書かせて、私たちの翻訳ボランティアが英語あるいは日本語に翻訳してお送りするように、やり方を変えました。しかし、まだまだ、いろいろと問題があります。

里子の事情によっては書けない内容もあるでしょう。翻訳者の能力の問題で、詳しく訳せないときもあります(この問題の解決は簡単ではありません。仕事の創出を伴わないと、能力向上の意欲を引き出せません)

里子の手紙が里親さんに渡るまでに、翻訳の遅れで、2～3ヶ月かかるときもあります。里親さんが

また、早い時期から、教育里親ー里子間の文通を始めました。『文通』のきっかけは、子どもたちが、自分自身の手で自分たちのことを語り、援助がどのように役立っているかを教育里親さんに知らせるほうがよい、と考えたからです。そしてもちろん、日本の皆さんと子どもたちとの、やさしい言葉を添えた絵や写真の1枚からでよいから、『温かい心』を交流して欲しいと願ったからです。



直接センターに送られた手紙に里子の番号が書かれていないとき、名前だけではわかりません。また里親さんが直接に都市部以外の里子に手紙を出し里子に到着しないこともあります。

本人同士の文通はなかなか難しいものですから、課題はありますが、上の図の流れで速く届くよう、皆さんと一緒に考えましょう(英文翻訳に統一するとか…)。

環境や文化、宗教、社会が異なる2つの国にいる里親さんと里子を結ぶために、文通のほかに考え出されたのが、里親ー里子新聞です。ですから、できるだけ文通を行いつつ、この新聞を里子からの手紙の代わりと思われて、スリランカの子どもたちのことを想ってください幸いです。ありがとうございます。

マンナー・レ地方の難民キャンプ報告

特別
寄稿

北部地方の子どもたちは明日を信じ、 幸せを願っています

C.P.I. スリランカオフィス

中濱

C.P.I. 本部

小西

スリランカ北部の長い内紛による難民キャンプには、私たちの里子もいる。以前は数十万人が避難していた北西の町Mannar(マンナーレ)地域の現在の様子と、子どもたちの課題を考えるために視察を行った。安全状況について北部地域センターからのレポートをとり、確認の上で夕刻コロンボを出た。ダンブッラで宿泊し翌朝8時前に出発して、車中で食事をとりながら向かった。道路は改修を終えていたため、マブダッチ経由3時間半と意外に早く到着した。教育省支局の、B.S. Enilil Culas氏を訪ね、案内を頼った。私たちの教育里子の面倒もみてくださっているので、各キャンプ・学校への話は事前にしておいた。



道路整備は進んだが、残された地雷はまだ多いようだ……

マブダッチを過ぎたあたりから、道路や橋に戦禍の跡のインフラ整備が急ピッチで進んでいるのが分かる。幹線道路は『驚くほどの綺麗さ』で(右写真)、戦禍で破壊された橋も頑強なコンクリートの橋に改修されていた。その橋は政府軍によって守られている(右下)。しかし、道路わきには、「ドクロ・マーク」(地雷あり)の看板が建てられ、このマークが完全に撤去されるまでには何年かかるのだろうかと思う。それまでは、子どもたちに本当の幸せはこない。



家族を亡くし、ほかに身寄りのない子どもたちが、 意外に明るい表情だったのが救いであった

学校に通う難民の子どもたちをみると、様子はわかりやすい。そこで、Pariharikandal 学校を訪問した。

校長のP. Santhlogu先生によると、難民の離キャンプ政策で、2002年初めには230名いた難民生徒が、2002年末には198名となり、現在はわずか75名となったとのこと(全校生徒は518名)。「とりあえず、自分の村に帰ったり、親戚を頼っていったということですね。ただ、村に帰っても地雷があるので農耕を再会できない家族が多い。キャンプに残っている人も、帰村したあと働き口がないので、出られないでいるわけですね」と校長先生は悲しそうな表情で語ってくれた。



橋は兵士によって守られていた

救いがあったのは、今回の視察では、家族を殺された子どもたちにトラウマ状況が見られなかったこと。Jeevothayamキャンプで、残っている子どもたちのうち、両親とも亡くした3名に話をきいたところ、「お父さんも、お母さんも、殺されちゃったの。でも、ここの人たちが親切だから嬉しい」と意外の明るさにビックリ。笑顔で話してくれたのには救われた思いだった。



内紛で身寄りを亡くした、タミール人の子どもたち

もちろん、生活の不安と苦しみがある

里子のスティーパナさんの家を訪ねた(右写真)。

風邪をひいて熱があるという。お医者さんは、6Kmも離れているので、三輪自動車でいくか、寝ているしかない。学校の先生

Mr. Yanaselsaram氏の話では、成績は抜群で、ほんとうにやさしい娘だという。

病気で亡くなるのだけは勘弁してほしいと願った。

母親はここにいない。叔母さんが子どもたち4人の面倒をみている。「いつまでここにいるの?」と聞くと、「ほかに行くところがないから」と答えた。心配で後ろ髪を引かれる思いで別れた。



「写真を撮るよー」と言うと、着替えてきた



難民クラスの生徒たち
この写真を大きく伸ばして送ると約束した。



スティーパナに話を聞く中濱



キャンプの家は、みんな仮小屋のままだ



食べ物も、結構きちんと売られていた。

難民がほんとうに帰村できたとき、 平和は訪れる。

いまの難民の課題は、身寄りなくボランティア施設で生活している子どもたちのケアと、自分の村に帰っても未だに地雷の埋まっているために農地を耕せない農民たちのことだ。前者は、数十人から数百人の単位でかなりの数があるとのこと(政府機関からの聞き取り)。ただし、全体の数を復興省ではつかんでいなかった。

大統領府高官は「ふたつとも、問題を早期に解決したい」とのこと。日本政府は、スリランカ政府による地雷撤去の効率向上に関しては、「文民統制の作業部局が発足した後ならば支援を考えたい」(大使館・大西一等書記官談)との構えだ。後者に関しては実態をつかみきれていないようだ。

問題は、政府の中で担当省が毎年変わること。

現担当省の次官(復興省Mr. Jayasingham)と話したが、短期間では成果が見えない部局なので、自ら積極的にそのような部局を作ることは避けたいとの印象。「日本政府が調査をして、必要な部局案と支援策を出してくれれば、財務省は支援要請を出すと言っている」と、完全に『外圧頼り』の様子だ。

人々が平和に暮らせるのは、まだまだ先だろう。

キャンプでの生活は、ぎりぎりの援助と日給労働で賄っている

皆さんは、難民キャンプの生活というものを知らない方がほとんどと思うので、紹介してみたい。

Jeevothayamキャンプを例に取る。

2004年10月27日現在で、263世帯、約1,000人が暮らしていた。統計は、毎日とっているとのこと。

10年以上前、キャンプ開設当初、政府が一世帯に5000ルピーを配り、それぞれに家の壁の材料を買い、家を建てたそうだ。屋根材(椰子の葉を編んだカジャン)は支給されたが、その頃の屋根はいまやぼろぼろ。

Rural Development Foundation(NGO)が屋根材200巻きを援助し、10世帯に役立ったが、残る世帯は雨漏りに苦しんでいる。20巻きで一軒分、6000ルピー(約6000円)である。

から、150万円ほどで、残りの世帯の屋根をすべて修復することができるのだが…。

後日、現地NGOと相談してみるつもりだ。

野菜、ココナツ油、ランプ油は、買わなくてはならない。収入源は、近くの農村の日給労働しかないという。一日200ルピーの収入。しかも仕事は毎日ない。月平均で10日も働ければいい方という。

米、豆、砂糖、ココナツ粉、魚粉などが一人210Rs/月の見当で支給されるのだが、最近3ヶ月は支給が遅れている。

「わずかな労賃を貯めていたお金で買ったけどねえ。これじゃあ、ここを出る準備もできやしない。とにかく、励ましあって生きていくだけさ」と、元・左官職人は嘆いた。彼の腕は、かなりのものだそうだが(周囲の曰く)、「求人してこないから、どこに仕事があるかわからない」と言う。

技能登録制度でもつくればよいと思う。

地方政府機関には、そのような裁量権があるのだろうか。いろいろと考えつつ、帰路についた。



もう屋根はぼろぼろなので、ビニールを買ったと言う



スリランカ教育省のマンナーレ支局



教育省のエンリル氏。いかついがやさしい



元・左官職人と技能者登録について話す(小西)



マンナーレ半島に通じる盛土の橋